

31
747



始



31-747



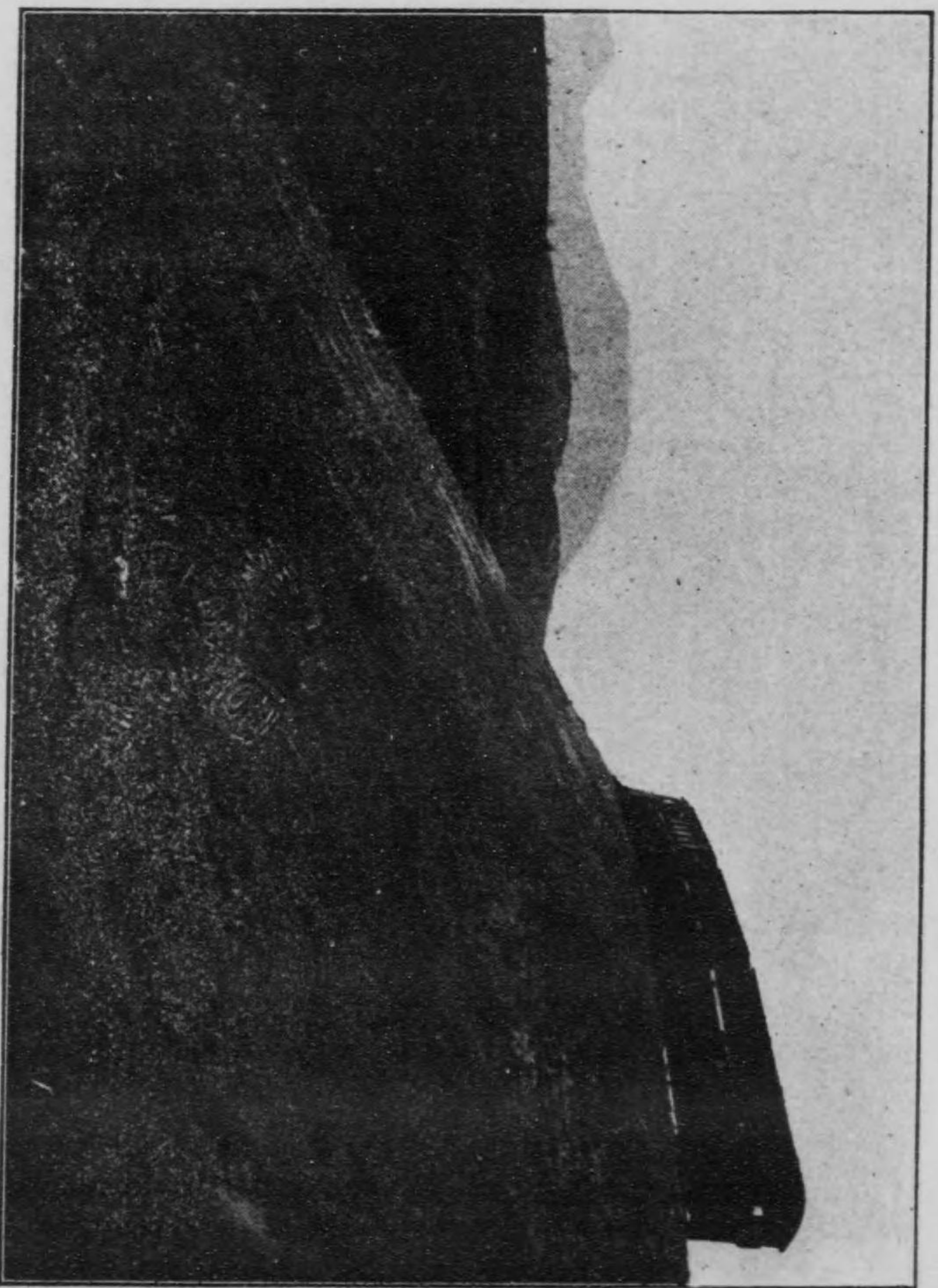
けむる

平井
晩村
著

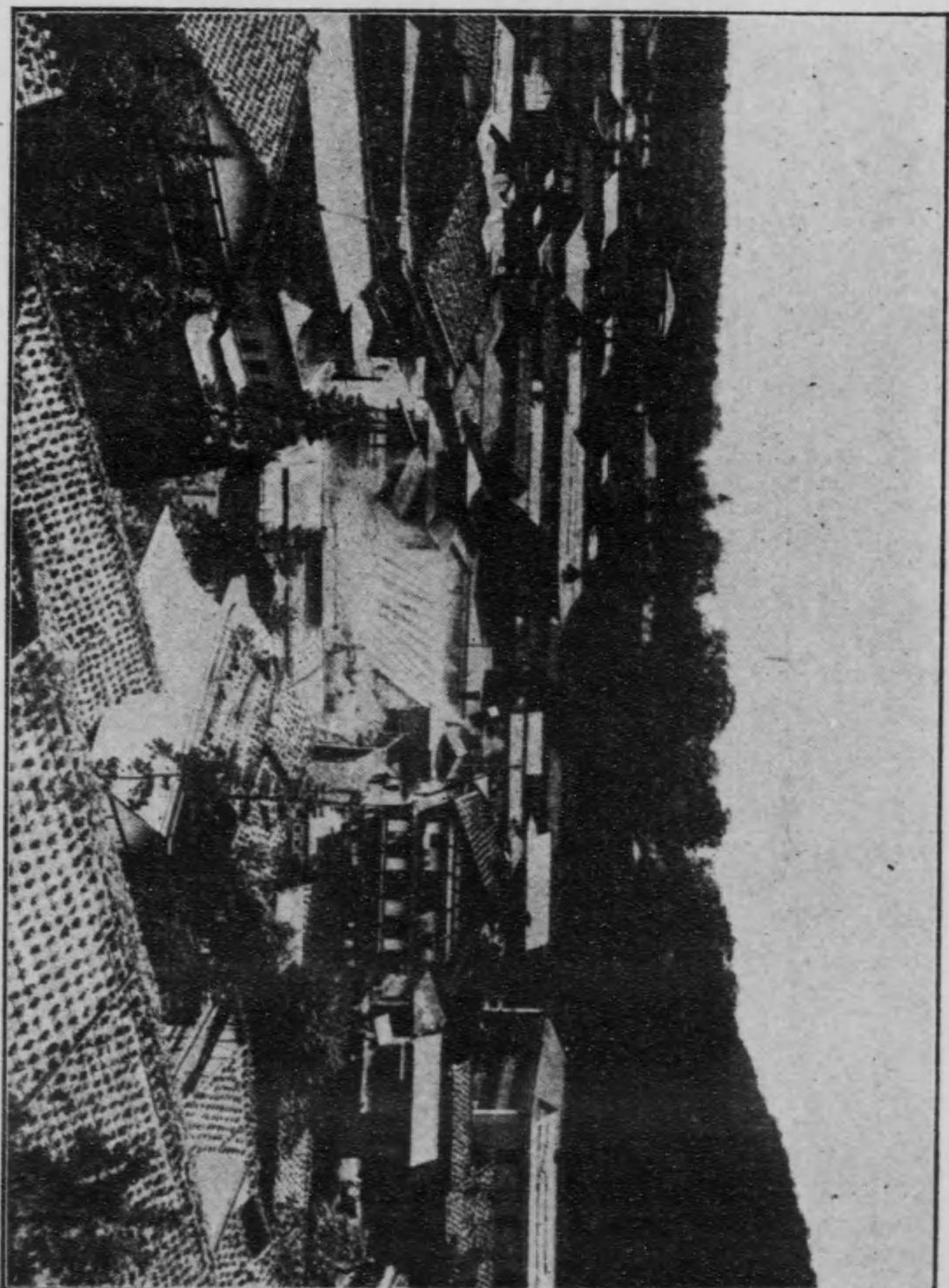




—尺百二千四拔海—

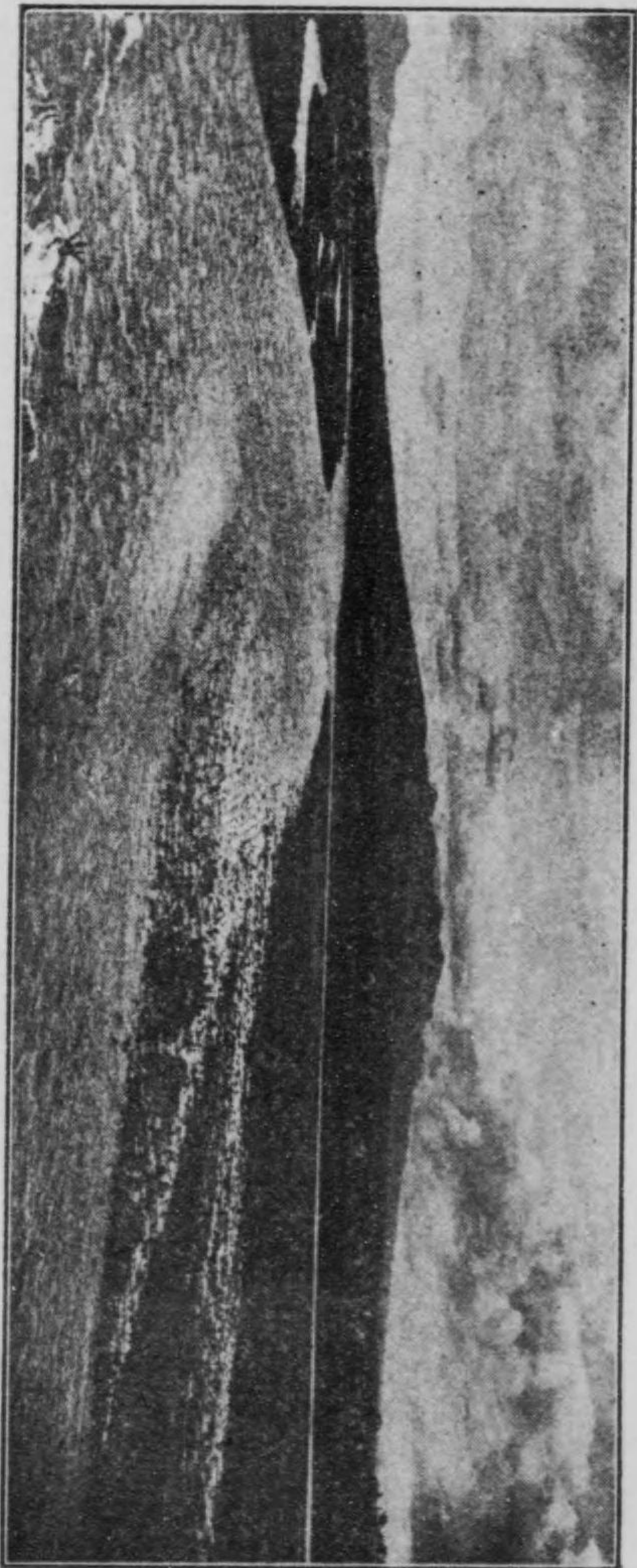


道鐵津草る走を原高の麓間淺



町の津草た見らか園公山園

—里　る　ふ　の　夢—



む望を山城赤りよ橋前里郷の者著

自序

自分の郷里上州は温泉國である。伊香保、草津、四萬、磯部、その他小さな温泉は数え切れぬほど澤山ある。従つて暑中になると、諸方の友人から、上州の温泉へ出かけようと思ふが、家族的に寛いで保養するには何處が宜からうかとの照會を受けるが、扱て返事を認めるのに當惑する。

お國自慢からは、直ぐにも伊香保四萬と認めたいが、自分の手紙を信じて出て来て、失望するやうな結果になつては氣の毒である。伊香保も四萬も温泉場としては萬事行届いて結構ではあるが、中流人士が家族的に保養するには餘りに繁昌し過ぎて居る。窮屈である。飛入りの客などは到底收容出来ぬのが近年の實況である。

ハテ何處が宜からうと思案の末に、思ひ出したのが草津である。自分は未だ一度も草津へ行つた事はないが、前年返子に居た頃服部秀君から草津土産の高山植物の鉢植を贈られた事や、望雲館の黒岩氏から手紙を買つてあつた事を思ひ出して、急に出かけて見る氣になつた。

三泊五日の入湯の感想や紀行は本書に記述した通りであるが、自分は始めて安心して友人に返事を認める事が出来るのを些ならず心嬉しく感じた。——平民的に——家庭的に——湯治の出来るこの理想郷を友人に紹介すべく、珍らしくも紀行文を書いて見たのである。——自分の書いた「草津紀行」の一篇を讀んでそれは草津へ行つて見ようと思ひ立つ人のある事を信じて疑はない。——避暑や湯治が富豪や名門の専有でない限り、中流平民の爲にも大自然の極樂郷があらねばならぬ筈である。この見地から、自分はこの度の草津行を決して無意味な旅とは

思つて居ない。些くとも我が上毛の地に、悠うした温泉のある事を天下に紹介するの愉快を感じるのである。

「芙蓉村合稿」は、亡き妻を追懐すべき湘南雜記を蒐めたものである。

「蚊遣草」は俳句を自選せるもの、捨て難き執着の存する勞作である。

要するに「湯けむり」二巻は、自分が昨年郷里に戻つてから始めて上梓する詩文集で——追慕——憧憬——の結晶である。

本書表紙圖案は小杉末醒畫伯。扉の圖案は大西島畫伯の好意になれるもの、謹んで感謝の意を表する。

大正七年八月

巻三 群馬横山町の歸にて

晩村記

目次

草津紀行

鈴蘭の花	一
■首途の朝	一
■落葉松のみどり	八
■海拔四千二百尺	一七
■旅の道づれ	二六
湯けむり	三三
■懐しき昔の夢	三三
■湯揉み唄	四〇

芙蓉村舍稿

■女の容	四八
■湯女のおも影	五六
■四の河原	六四
■覺車	七一
露提灯	七九
田甫の一日	九八
鳴子を聞きつゝ	九六
冬菜蒔く頃	一〇〇
■露のあかつき	一〇〇

蚊遣草

(昔吟百切)

■少年の汗	一〇三
■芋を掘る女	一〇六
■夕の家	一〇九
■野の幸	一一一
■梨賣り小女	一一四
■見知らぬ里	一一六
■草の實	一一九
■旅役者	一二三

草津紀行

- 大正七年六月二十二日。前橋横山町の寓を出て、石橋如山君と草津温泉へ志した。
- 初夏の旅衣は肌に軽く、山路の眺め、心の窓を晴々と明るくした。
- 草津へは始めての旅であるだけに、想像から産れる期待が淺からぬ興味を醸した。
- 終日の旅に疲れた圓太郎馬車の裡から、湯けむりの底なる黄昏の灯を窺んだ時の欣び。
- 忘れがたき印象やら感想を書きとめて、久し振の旅行の記念とした。

鈴蘭の花



鈴蘭の花

首途の朝

二年あまり、蝸牛かたつねのやうに家にばかり屈かまつて居た自分が、明るい初夏の陽に誘はれて俄かに旅へ出ようと思ひ立つたので、空氣枕を探すやら、毛布を干して疊かさねひやら、萬年筆にインクを注つぐやら、手廻りのものを揃へるだけにも心が疲れた。殊に自分の留守中は女中の手に豫けてゆかねばならぬ幼ない子供等に、學校の必需品や小

遣まで分けて遣つて、各自臥床へ送つた頃には、小窓の上の夏空に、
 稍々更けそめし星がこぼれて、宵の雨に濡れた青葉が暗く淋しく風
 に動いて居た。

如山君も明朝が早いからと打合せを済ませて戻つて行つた。

男世帯が氣の毒さに、旅の仕度の裁ち縫ひの糸針を持つて来て呉
 れた伯母さんを相手に、机の前で原稿を書き急いで居るうちに、い
 つしか鐘撞堂の二時の鐘が聞えた。心静かに冷えた茶を啜つて居る
 と、利根の瀬音が手に取るやうに聞えて来る。

『明夜の今頃は草津で寝られるんだ。……湯瀧の音でも聞かれるか
 知ら。………曉の枕のうへに、山の縁はどんなにか涼しい風を送

るだらう』

未だ行きも見ぬ草津の風光を、さまざまに心に描いて、刻のうつ
 るのを忘れて居ると、寢そびれた隣家の鶏がかさこそと起き出した
 今から床に這入る間もないから、井筒に顔を洗つて来て、味ない舌
 に煙草を吹かしつゝ夜の明けるのを待つ事とした。

盆栽の柘榴が、奈良人形の袖を見るやうな丹の色に蕾んで、可愛
 らしい葉蔭からちつと自分を見詰めて居るやうに、こちらを向いて居
 た。——草津から戻つて来る頃には散りこぼれて了ふだらう。留守は
 根土に水を遣るものもあるまい。——夜露の降りる屋根のうへに鉢
 を出すと、最早手許に薄すらと東雲の明るさが動いて居た。

静かなく庭松の遠くから、チユン／＼と朝の雀が啼き勇む。——
 親もあらう、子雀もあらう、兄妹もあらう、同じやうな姿をして、
 單調な生活を繰返しながら鳥指しの來ぬその口／＼を安らかに送つ
 てゆく彼等の生涯にも、尙且自分が嘗めつゝある人間界の苦楚に似
 た浮沈や喜憂があるであらうか。せめて彼等は、お伽噺を背景とせ
 る無邪氣な舞臺の役者として一生を踊り暮させたい。生ひひに人間
 と産れて何等の收穫もなくあくせくしながら、燈心草とうしんぐさに油の盡きる
 やうに墓に匿れてゆくものに比べたら、寧ろ貧富も勳爵もない平等
 な雀の一生が幸福であるかも知れない。

自分は無理な富を築かうとは思はない。正しき自己の努力によつ

て、楽しく打寛いだ生活を續けてゆくだけで充分である。——名に古
 りし儼暖の蔭から何の苦もなく學校へ送られた自分は、祖父母の慈
 悲と物質的の供給とを存分に啜る事が出来た。——それが昔の夢と
 なつた今でも、露ほども世の資産家や勳章持ちを羨ましいとは思は
 ない。それよりも、日盛り暑き荷車の上に、古びた洋傘かさをさしかけ
 て嬰兒みどりごを寝かせ、夫婦ども／＼汗を絞つて稼いで活きる人々の生活
 が羨まれる。

片親になつて、子供の行く末を考えると、藪入小僧の紺前垂も、
 縣廳通ひの給仕の提げた辨當箱をも、等閑たぼざりに看過されないやうな心
 持になる。——若しや自分の小供があつた境遇になつたら——と

云ふやうな遺瀨ない思ひを強ゐられる事が多い。

それ等、幸不幸の岐路に立つて、母のない不惑な子等に行くべき途を訓へるのは天にも地にも自分だけである。自分の責任である。其責任を完ふすべき自分の資産は黄金でもなければ勳爵でもない。純なる肉身の愛と、正しき不斷の努力とである。たとへば秋草に頭を吹かれて野末の宵を辿るやうな、淋しい思慕の念に繋かれたわれ等父子の間柄は、互ひに離れたくない、一日でも長く顔を見合せて居たいのである。

『父さん。草津へ行つたらエハガキを送つて下さる』

『暑中休暇なら僕も連れて行つて貰ふのだけれど……』

『ち土産には何を買つて来て下さるの』

前宵臥床へ這入る前に、子供達の云ひ互した言葉の端を思ひ浮べ

るにつけても、自分の留守中は其塵にか淋しがる事であらう!
子供等は未だすやくと階下で寝て居る。夢に戀しい亡き母とでも逢つて居るのであらう。

窓の外が明るくとなると、刻の鐘が五時を打つた。迎ひの俤が来た。

仕度をして玄關へ出ながら、子供等のひとりごりの寝顔を覗き込

みながら、心のうちで

『行つて来るよ。おとなしく仕て居なさい』

と云ひ置いて俵に乗つた。

『お早くお歸りなさい。途中でも寒いやうでしたら鞆のなかに裕のお羽織も襦衣も入れて置きましたから……』

『有難う。……子供の事は頼みますよ』

門口まで見送つて呉れた伯母さんの手から、冷やしたサイダーと果物籠を受取つた頃には、俵の幌に霧のやうな曉あかつきめ雨が影のやうに降りかゝつて、夜更かす街の軒續きは、静かに板戸が閉たてられてあつた。

葉落松のみどり

麥が穂に出て淺間が霞む

淺間は高き山なれば

雪にうもれて咲く花の

名もあり無しや夕煙

寢不足のうづら〜と汽車の窓に靠れながら、舊作の一節を口吟くちんんで居るうちに、高崎で信越線と乗替へになつた。安中を過ぎ磯部を越しても思はせ振な雨は止まない。

『輕井澤へ着くころには止んで呉れ、ば宜いが……降つては淺間も見えまいしね』

如山君と愚痴をこぼしながら、平に濡れた窓の外を眺めると、既に山路に差蒐つた初夏の風物は、繪草紙を繰りひろげるやうに快く彩られて居た。

墨繪のやうに煙つた山のなだれ。段々畑の麥の穂も赤らんで、さまくくな野の幸が活々と豊かに肥えて居た。幾重にもくく緑を疊んだ峽を縫ふて、アプト式の汽車は遅々として登つて行く。——遠く低い谷川の巖の上に簑笠を着て雨に濡れつゝ魚を釣つて居る男や、露はに住んだ在家の軒に、そくくくと桑の葉を刻んで居る娘や、俳畫めいた詩材が見る目を欣ばせる。——時計を見ると七時を過ぎて汽車は今碓氷峠の難路をどくと喘ぎながら登りつゝあつた。

『子供達は機嫌よく學校行きの仕度をしたか知ら……』

父様行つて参ります——と常のやうに枕許へ両手を支いたとて、諾と云ひつゝ寢返りを打つ自分の顔は見られまいに。——今頃は伯母さんと一緒に御飯でも食べて居るだらう。——なぞと思ひつぎくく如山君と話し續けてゐるうちに、漸やく輕井澤へ着いたのが八時二十分。

『草津行の輕便は今出て了ひました。この次は十一時五十一分です……七月からも幾回も都合よく接續します』

詮方なしに手荷物を赤帽に渡して待合室に這入ると、卓上の木箱に涼しげな白い花をぎつしり植えて飾つてあつた。

『何の花だらう!』

近よつて見ると、小さな木札に『鈴蘭の花』と邦語と英語とで説明が書いてあつた。

『如山君、これだよ、鈴蘭の花は……何處どなく高原に咲きさうな姿ぢやないか』

ぶーんと鼻へ来る爽やかな匂ひ。——聽て兩人が待合室を出ようとする、擦れ違ひに十六七の英國人らしい娘が這入つ来て、同じやうに鈴蘭の花を眺め入つて居たが、四邊の人目を憚かるやうにその一莖を摘まんで帽子のリボンにはさんだ。

その上品な態度、取澄した利發らしい横顔。——帽子にはさんだ

鈴蘭の花に相應はしい氣高さであつた。

『憎くない花盗人だね』

軽い微笑を残して、自分等は丸本旅館の離座敷に枕を借りて横になつた。睡るどもなくとろ／＼として眼が醒めると冷氣が肌に忍んで来る。風邪でもひいてはと鞆から裕羽織を出して着た。——發車時刻に停車場へゆくと、ボギー電車ほどにも足らぬ可愛らしい客車が二輛、玩具のやうな機關車の後ろに繋がれてあつた。犬を連れれた外人や、別荘へでも行くらしい紳士の家族やらが、互ひに席を譲り合ふて行儀よく對合ひに腰をかけた。

發車の笛も煩さからぬ程に、可愛らしい輕便鐵道は輕井澤の驛を

離れた。

雨は晴れたが、淺間は雲を冠つて見えなかつた。

舊輕井澤、三笠、鶴溜と小さな驛を越えてゆく左右には、嘗て見ぬ雄大な眺めが明るい緑を湛えて居た。

險に泌みるやうな落葉松の若い緑の遠近に、赤や白で塗り立てた洋館や、雅びな日本風の別荘やらが幾つとなく散らばつて居る。乗馬の西洋人の夫婦づれが、荐りにハンケチを振りながら、汽車と並んで圓く滑らかな草山を駆けさせて來ると、自分の向ふに腰をかけた居た老齡な外國婦人が、窓の外へ乗出すやうにして同じやうにハンケチを振つた。

汽車が小瀬驛につくと、乗馬の外人夫妻は先廻りして停車場の燒柵に手綱を結んで居る處であつた。

『驚いたなア、馬より汽車の方が遅いんだから面白いね』

二人連れの學生が相顧みて無遠慮に笑ひ興ずるうちに、老婦人はよた／＼と汽車を降りて若い夫妻と抱合つて接吻した。——親子でがなあらう。——羨ましい程の睦まじさであつた。

小瀬には温泉があるさうな。——汽車かのろ／＼と出發すると、先刻から對手欲しさうに沈黙して居た村役人らしい男が、喋々と學生に話しかけた。

『この鐵道は遅いところが價值なんです。外人が世界一の觀覽鐵道

だど褒めちぎるのは、憊うして汽車の窓に涼しい風を浴びながら、自然の風光を賞する事が出来るからです。……それには矢つ張り牛の歩みのゆるくと進んでゆく方が宜いです。第一餘り急いで進行すると眼が廻りますからな』

牛の歩みまでは鹿爪らしかつたか、眼が廻るに到つては學生もこみ上げる可笑しさを堪えてゐるらしかつた。

『更に盛夏七八月に到つてはですな』

喋々子は聞えよがしに辨じ続ける。

(自分はその男の氏名を知らう筈がないから、假に喋々子を以て代名詞として置く)

立樹たちきのない滑らかな山は、柔らかな夏草に包まれて砂丘のやうに盛れあがつて居る。その中腹の二本の線路が長く、光つて見える。この邊の童達が、先へくと山を越えては、汽車を手招ぎして、早く来いと云はぬばかりの身振りをして囃し立てる。例へやうのない面白さであつた。

海拔四千二百尺

小瀬までに客も大分降りたので、客車も一輛に減らされた。海拔四千二百尺の山冷は、ぞくぞくと襟に泌みる。窓から流れ込む青草の匂ひは、袖も帽子も染まるかと思ふほど涼しかつた。名知らぬ禽

の行衛に誘はれて窓から覗くと、遙か下に谷間の水瀬が帯のやうに白く靡いて居た。——どんよりとした薄日のもとに打展けた上毛平野は、蚊帳を干したやうな一刷毛の緑に埋もれて居た。——あの緑の底の何處かに、今頃自分の子供達は読み書き曾呂盤のお稽古をして居るのであらう。祖父母、父、兄、妻の白骨を埋めた菩提寺は各の邊に當るであらうか!?——囚はれ易き旅愁の裏には、幻のやうに懐かしい草津の光景が浮んで来る。

草津とは其處とてあらうか!?

昔ながらの湯治場氣分が残つて居るであらうか!?

四萬、伊香保、函根、湯河原、嘗て自分が滞在した温泉場の追懐

を織ぎ合せて、その隙間から未だ見ぬ草津の現在を胸に描かうとする樂しみは格別である。——自動車や、藝者や、曖昧茶屋によつて俗化されつゝある温泉地からは、眞の湯治の趣きは塗り潰されて了ふのだ——自分は草津が然うした好もしからぬ時弊の外に、温泉地特有の落ついた鄙びた係を保つて居て呉れれば宜いがと、そればかりに一縷の望みを托して居た。

草津の消息を知るには、車中の喋々子も亦捨てたものでない——自分は読みさしの本を膝に伏せて、喋々子の贅辯に耳を傾けた。

「……七八月になると、この汽車はまるで外人専有の觀があるので、輕井澤あたりへ避暑に来て居る外人は、回数券を買つて毎日の

やうに汽車に乗つて沿道の風光を觀賞に出かけるのです。この淺間麓一帯の地、即ち六里ヶ原ほどの雄大な景色は凡らく日本に二つとはありませんまい。……輕井澤から徒歩でこの沿道を踏破して、草津の温泉で疲れを流して、更に白根山へでも登山したら、それこそ理想的の避暑旅行ですよアハハ、ハ、ハ、』

獨りで腹を抱えて笑つたが、誰も合槌を打つものもないので、聊か鼻白んだ形で扇をばちちと鳴らし始めた。

汽車はのろ／＼と小さな驛に這入つた。『二度上』と記してある。

『何と讀むのだらう』

學生の私語を小耳に狭むと、喋々子得たりとばかり。

『ニドアゲと讀むのです。實に了解し惜い驛名です。それに就て這麼話がありました』

車中の客の大半は心にも留めぬらしく傍を向いて居た。——自分は聞くでも、聞かぬでもなく眼を瞑つて居た。——喋々子の話は恁うであつた。

最初この驛名を定める時、草津望雲館の主人黒岩忠四郎君が、寧ろこの邊の名物たる鈴蘭の花に因んで鈴蘭驛としたら什麼か、そして根土の儘の鈴蘭を小束に造つて、遊覧客が土産に買ふやうにしたら什麼かと提議したのださうな。——自分はこの話を非常に面白く聞いた。——望雲館はこれから自分が志す旅館で、主人の黒岩君と

は面識こそないが文書の上の知己である。黒岩君がこの鐵道敷設の大恩人である事も知つて居るだけに、何故無理にも鈴蘭驛と命名して呉れなかつたのかと残念に思つた。鈴蘭驛！ 海拔四千尺の鈴蘭驛!! 只それだけでも、熱暑に喘ぐ都門の人に涼しい感じを與えるではないか。

栗平、地藏川を経て終點の吾妻驛に下車すると、これから四里の山路を馬の脊かがた馬車(圓太郎馬車)に揺られて草津へ行くのである。自分は途中で降られでもしてはと空模様を案じて馬車に乗る事にした。

テト〜テト〜と喇叭が鳴ると、叱ッ〜と馭者の手に鞭が動

いた。馬車がゴ〜と烈しく揺れながら前進を始めると、短軀肥

満の如山君が

『オット、危険な』

と確かに幌骨に搦まつた。隙さず馭者が

『旦那は廿五六貫もありますかね』

と訊いたのは滑稽だつた。長雨ながあめの晴れて間もない悪路の泥土は、ごぼり〜と車輪を呑む。その都度乗合同士が鉢合せをしさうになる。

『これは、失禮を……』

『私こそ。……悪い道ですな』

顔と顔とを見合せて煙草の火の貸し借りが始まる頃には、馬の鬣が汗に濡れて、トンネルのやうな青葉の林を幾つか潜り脱けて居た——吾妻まで一緒に來た學生は、尻からげの素足に中齒の下駄をはいて、てく／＼と後になり先になりつゝ、車中の我等と笑顔を交換する。馬の脊の櫓に縋つて來る客は遙かに遅れて了つた。——時鳥未だ巢にひそむ春曉でもよい。或は佗しい秋風に高原の草が白う枯れゆく黄昏でもよい。遠い昔の心にかへつて、金銀小粒を確かりと腹巻にく／＼しつけて、咬へ煙管で馬子唄を聞きながら草津入湯の旅の衆に雜つたら甚麼に香氣な道中が出來たであらう。文政の洒落もの十返舎一九の全集には『草津道中膝栗毛』の一篇があつた。凡らく

一九も菅笠の紐に峠の汗を拭きつゝ、こゝらの山路に切れた草鞋も捨てた事であらう。

二里ほど來た崖道で、若い娘が竹杖を突いて、母親らしい人の肩に片手を載せて憩んで居るのを見かけた。

『なあ、オイ。……よく愈つたな。彼の娘がよ』

『左様さな。來る時には毛布ケルトに包んで、親父おやぢが嬰兒わんぱくのやうにおぶつて來たんだが』

聞けば小瀬あたりの百姓のひとり娘。脊髓を病んで海老のやうに臥床のなかに屈かまつて泣き暮して居たのを、兩親の慈悲から草津へ湯治に連れて行つたのださうな。

『この次、草津へ来る時には婿に手綱でも曳かせて、櫓のうへで赤ん坊でも抱いてるだんべえ。……美しい娘だな』

馱者は這麼無駄話をしながら、思ひ出してはテト／＼と喇叭を吹く。——その音が笈をつくると、山の畑に働いて居る頬冠りが、心なげに鍬をやすめてこちらを向く。

馬車は途ある村の茶屋の前にとまつた。

旅の道づれ

馱者は冷たい筧の水を手桶に汲んで来て、我が子でも動はるやうにほらよ／＼と馬の口泡を洗つてやつてから、爐べりへ腰かけて駄

菓子などを摘んで居る。

自分達はその儘馬車の裡にゐると、茶店の婆さんが古びた盆に麥湯の茶椀を載せて持つて來た。皆はそれを美味さうに呑んだ。

『茶代は……』

『一錢づゝでいゝでせう』

白股引の商人が一錢銅貨を摘んで盆に置くと、乗合衆の手から幾つかの銅貨が盆に投げられた。馬車は再び難路を登つて、洞の口に着いた。此處からの一里が馬も人も汗を絞るところ、馬も取替へると聞いて僅かの閑を茶店の座敷に寛いだ。

早瀬に沿ふた軒を掠めて、岩燕がすい／＼と白い腹を見せて飛ぶ。

山の肩から離れた雲の峰の象が見てゐるうちに變つて行く。眉に涼しい山風の吹き来るなべに、躑躅は赤く、藤は濃染めの紫に咲いて居た。——里では既に蚊帳繕ひの針の手も急がねばならぬこの季山の奥なる草津街道に、曆に遅れて咲く花が嬉しかつた。

金米糖を摘みながら、乗合衆はぼつ／＼と話し續ける。

『私は冬になると神経痛に悩まされますので、夏のうちに用心して毎年恙うして草津へ湯治へ來るのです』

脳病だと云ふもの、レウマチスだと云ふもの。——誰あつて花柳病の爲に云ふものはない。

『草津は花柳病にばかり効くやうに聞いて居ましたが、他の病にも

宜いのですか』

行商らしい一人が口を挟むと、皆の眼は不快らしく見互はされた。

『冗談ぢや有りませんよ。私達は恙う見えても無垢なんですぜ……草津を病人ばかり行くところと思つて居なされると大間違ひ。避暑がてらの湯治には唯一無二の涼しい處なんですよ。第一、空氣の加減で草津には傳染病と云ふものは無し、伊香保や函根のやうに贅澤づくめのお客が些ないから、香氣に悠くり保養するにはこの上なしなんです。いまに御覽なさい。輕便鐵道が草津まで全通すれば、草津は日本一の温泉場になりますから……湯畑なんぞは大したものですぜ』

我が所有でもあるかのやうに力瘤を入れるのは、江戸つ兒らしい四十男であつた。

馬車の仕度が出来たので、再び幌のなかへ這入つた。三丁、五丁と登つてゆくに伴れて、山の静けさが深くなつて、雨雲が低く垂れ下つて來た。如山君は馬車の轍が泥土に沈むと

『馬が可愛さうだ。人助けぢやない、馬助けに歩いて遣らうか』と殊勝らしく馬車から降りる。馭者は馬に替つて懇ろに禮を云ひ

つゝ

『旦那が降りて下すつたぞ。ホラ、怠けずに歩かねえか』と鞭を鳴らす。——馬奴うまかこれに味を占めてか、如山君が乗りさへ

すれば脚をとめて駄々をこねる。有紫の如山君も二十二貫の巨軀を持餘して

『恚う馬助けが続いては、僕の方が助からないぞ』

と大笑ひになつた。——遂々細かい雨が來た。

『もう直ぢきです。この山を一廻りすると目の下が草津です』

馭者の氣休めに活氣づいて行く程もなく、馬車は草津の街に着いた。

草津！ 草津!! —— 餓じい嬰兒が、母の懷ろへ戻つたやうに、疲れも忘れて馬車から降りると、迎ひの傘には『望雲館』の三字が染めてあつた。

だら／＼坂の街筋を降りてゆくと、濛々と立のぼる湯煙の匂ひが懐かしく立罩めて居る。二階建三階建、立派な洋館や、古風な日本造りの欄干かざしから、湯疲れの人々の顔が幾つとなく物珍らしげに我等を見おろして居た。

自分は望雲館の三階の一室に、長火鉢を前にしてやれ／＼と跪座かたまりを組んで香の高い茶を啜つた。

湯 け む り

懐かしき昔の夢

軽い褌袍に肌を包んで浴槽に降りると、氣持の宜い小さな浴室が幾つも並んでゐた。

他の客と混浴せずとも自分達だけで心の任に一室を占領する事の出來るのが何よりも嬉しかった。——耳朶みみたぶまで温泉に浸つて存分手足を伸してから、更に眞水まづみの湯に這入つた。

洗面所の笥の水は、爪も凍るほど冷たかつた。

湯上りの軽き疲れ。——殊にそれが母の亡い子を留守の家に残して来た自分には、淡き旅愁に誘はれ勝であつた。——仄暗い灯のかけにエハガキを書いてから食事を終ると、萬事明日の事にして臥床に這入つた。——摘み綿の柔らかな布團に樂々と横になつて、按摩の話聞いて居るうちにうどくと寢入つて了つた。——常は夜更かす机の上に、曉の鐘を聞くさへ珍らしくない自分が、現どもなく寢急いだ旅の一夜。温泉の暖もりの爲か、夢さへ見ずにすやくと枕に縫つて何事も知らなかつた。

眼をさますと、白み初めたる障子のもとに、如山君は既に一風呂

浴びて来て新聞を読んで居た。起き出してみると夜すがらの雨が今朝も靜かに降り續いて居た。

『雨か……』

呟きながら障子を開けて廊下に出てみた湯の町の眺め。——四圍の景色——始めて明るい陽のもとにつくくと見た雨の草津は、自分の期待をその儘の床しさを保つて居た。

古く久しい歴史に富んでゐる土地だけに、建て連ねた温泉宿の何處やらに落ついた気分がある。時代に應じて改築された西洋館が湯煙に模されて隠見するのも憎くない。街の周圍の樹々の緑は、遙かに山の根に通ふて鮮かに冴えて居た。欄に沿ふて裏手へ廻ると、屋

根に石置く納屋のあたりに、名も知らぬ梢の花が、散りあへず咲きしづれて居た。

朝湯の濡手拭を欄干にかけると、カラン／＼と鈴が鳴る。チヨン／＼と拍子木を叩く音がする。

『時間湯の相圖で御座いますよ』

女中の話に嫉られて、早速宿の傘をさして手近な松の湯へ見物に出かけた。

『建久四年に頼朝公のお入浴になつた御座の湯は彼です。今では白旗の湯と申します』

案内の番頭が指さす方に、錢湯のやうな建付の浴舎が見えた。――

自分は平素の癖として、直ぐに建久の昔の事を想ふた。――建久四年春三月、淺間の狩の本陣を吾妻郡三原の莊に据えた頼朝が、土豪細野幸久を案内にしてこゝら山路に分け入つた時、圖らずもこの里に立のぼる湯煙を發見して、試みに足利駒王丸を浴みさせてみると、多年の宿病がさらりと苦もなく癒つたので、頼朝自身も欣んで湧き湯に浸つて所勞を慰したと傳えられて居る。

白根の麓の彌生と云へば、未だ山々の雪も深く、木の芽うつ樹も無かつたであらう。その寒い／＼風のなかに狩裝束を脱いでじつと湧き湯の熱さを堪えた頼朝の面貌は甚麼であつたらう。それにつけても、思ひ出されるのは五郎十郎の曾我兄弟である。彼等は父の仇

が討ちたさに、淺間の狩にも供の末に紛れて跟いて來たのである。
 (頼朝は淺間の狩を終えて鎌倉へ還ると間もなく、再び富士の裾野の巻狩を舉行したので、曾我兄弟はその陣中に素懐を遂げたのである) 然すれば彼等兄弟も、このほとりの各れにか肌寒き夜の夢を結んだに違ひない。その當時の頼朝の意中や奈何、世を狭めたる曾我兄弟の感想は何處であつたらう! 常人ならで知る由もなき喜憂を或は湧き湯の精が知つて居はすまいか、山の神が知つて居はすまいか。

一説には養老五年に大和菅原寺の行基僧正が、この地に杖を曳いて發見したとも云ふ。更に遡つて、日本武尊が東夷征伐の歸路に發

見したとも傳えられて居る。

降つて永祿年間には武田信玄が陣中の傷病者を此處に送つて療養せしめた。文祿四年正月には、豊太閤が温泉浴の先觸まで出したが故あつて中止になつた。寛保に到つて將軍吉宗の命によつて遙々江戸まで温泉を送つて、柳營の奥なる風呂に湯花の匂ひを湛えたのであつた。

大江戸城の奥では、奥方や、美しい局達までが、お裾分けの草津の湯を程よく沸かして、風呂桶の淺きながら玉の乳房も洗つた事であらう。それを狩の陣中に入浴した頼朝の心境に比べてみると、建久と寛保との國勢の懸隔があり／＼と判るではないか。

湯けむりの絶えぬやうに、歴史上の事實は常に想像の翅に匿れてわれ等が思慕の情を煽るのである。

松の湯の脱衣場は、近所の温泉宿から集まつて来る老若男女の浴客で一ぱいになつた。約七八十人はあらう。——時間湯即ち共同浴場は、この外にも熱の湯、白旗の湯、鷺の湯、千代の湯、地藏の湯の六ヶ所にあつて、一日に五回、鈴や柏子木の相圖で集まつて来て浴するのだが、その方法が草津特有のものとして聞いて居るだけに、興味が深かつた。

湯揉み唄

商人、官吏、お百姓、隠居、千差萬別な男達が、お早う〜と顔馴染の心易げに挨拶しながら裸になつて、各自持参の筒袖襦袢を着てタオルを腰に捲つけて大きな浴槽の周圍に並んで板（巾さ一尺長さ六尺位のもの）を持つて湯揉みを始める。板の先を浴槽に入れて手許の一端を器用に兩掌で操つりながら、身振り足柏子面白可笑しく拍子を揃へて、ドッコイ〜と湯を揉むのである。その光景が如何にも呑気に楽しさうである。聲自慢の客が

『三浦三崎でヨ——』

と船唄で音頭をとると、他の面々もこれに和して唄ひながら『コリヤ、ドッコイ〜』と約三十分ほど揉み続ける。湯長と稱する世

話人が寒暖計を入れて温度を圖つて宜からうとなると、一同は赤裸々になつて眩惑せぬように檜杓でざぶ／＼頭に湯をかけてから足袋を穿いて號令を待つて居ると、湯長は三つに仕切られた浴槽の温度をみてから、兩手を腰に反身になつて、脊後の柱時計を尻目につ

『宜しくば、そろ／＼下りませう』

と極めて静かに、落つき拂つて號令する。一同はオーイと一齊に元氣らしく怒鳴りながら浴槽に沈みかけるが、何しろ百二三十度以上、の熱湯、眉を擡めて眼をつぶるもの、唇を噛んで唸くもの、そろ／＼と肩まで沈むと、誰あつて私語するものも無い。

『揃つて三分』

『オーイ』

湯長は柱時計と浴槽を見比べながら、語尾を長く引いて號令する

『改正の二分』

『オーイ』

皮膚を焼き爛らかすやうな熱湯のなかで、下腹に力を入れて辛棒する浴客は、分秒の息を刻みながらも、單獨に浴槽から出る事は禁じられて居る。之れが時間湯の法則である。若し一人でも不覺なものがあつて、途中で飛上りでもすれば、熱湯が波爛して同槽者の肌を侵すから、一旦湯長の號令のもとに沈んだ以上、三分間は是が否

でも忍ばねばならぬのである。

『限つて、一分』

『オーイ』

『ちつくり、御辛棒』

『オーイ』

『辛棒の仕どころ』

『オーイ』

『宜しくば上りませう』

應とばかりに飛出したゆで、章魚のやうな浴客は、爛れた個所の手當をして急いで温泉宿へ戻つて行く。——その後で、女の客が同じ

やうに湯長の號令で三分間浴槽に沈むのである。

自分は宿へ戻つて、晝ながら障子の蔭に手枕をした。

『湯揉みの拍子に合ふやうな唄を作つて見ようか知ら……』
つれづれなる儘、扇の白地へこんな文句を書きつけて見た。

草津よいとこ里への土産

袖に湯花の香が残る

草津よいとこ白根の雪に

暑さ知らずの風が吹く

自分が草津へ再遊して、好事家の口に拙ないすさびが唄はれるのを聞いたら、甚麼に興の深い事であらう。船唄にせよ、茶摘み唄に

せよ、海にも山にも作者不祥の面白い文句が傳えられて居るのは、時にどつての旅人に無上の慰安を與へるものである。——自分の老後に金と刻の餘裕があつたら、心任せの旅の泊りに、その土地々々の鄙歌を作つて歩きたいと思ふ。

時間湯のあとの草津は、暫らく朝の静けさに包まれて居た。——元氣よく湯揉みして部屋に戻つた老若男女は、熱湯に爛れた局所々々の痛みの薄らくまで、鳴を鎮めてじつとして居るのである。——然し草津へ來る浴客の總てが時間湯に這入るのではない。多くは温泉宿にある家族的な内湯を使用するので、單に避暑を目的とするものは、眞水の湯だけで済ます事も出来るから、草津へゆくど爛れる

ど云ふやうな噂は、ほんの皮相な觀察から産れた誤解に過ぎない。ほそくと初夏の雨の煙るなかを身輕げに燕が飛ぶ。その燕が里で見るとは異つて居た。女中に訊くと

『あれは岩燕と申します……草津では鯛も啼きませんし、蟬の聲までが里とは違つて居ります』

どの事であつた。——それも海拔の關係からであらう。ふと眼をうつすと、直ぐ隣りの大東館の二階に、女の客同士が髪を結び合はうて居る。同じ部屋に住む連では無いらしく、半ば開けたる襖の蔭に茶道具の別々に置かれてあるのを見ると、互ひに湯宿で馴染になつたお友達らしかつた。額白のすらりとした姿、粹な伊達巻に浴衣の

腰を締めて鏡の前にくの字に座つた仇つばい年増は江戸ものらしく、後ろへ廻つて器用に髪を梳いて居るのは、何處やら初心な里の娘らしかつた。

聞けば娘は明朝里へ下るのたどやら。暫らくの馴染ながら、隣室の客と別れる寂しさを語り合うて居るのであらう。

女の客

自分は鏡の前に座つて居る年増と、髪を梳いてゐる娘の心を汲んで、恁うもあらうかと『女の客』の一篇を作つて見た。

ほのくくと湧き湯の煙

立のほる峽のほそ道

なつかしき草津の宿の

かり枕、しばし睡るむ

屋根の石、雨降るまゝの

静けさよ障子のかげの

立て鏡、髪も結び合ふ

垂れこめて——女の客は

つれづれの軒端の雨に
爪弾きの三味も鳴らしつ
湯上りの心なごみて
ふる里の事など懐ふ

やはらかき飼蠶の桑に
色まさる、こゝら國原
しばらくの閑をぬすみて
湯治する女の客は

馬の脊の登り降りに
立別れ隔たりぬれば
假初の馴染ながらに
なつかしと玉章も書くかな

一週間、二週間と滞在が長くなればなる程、湯治場の客同士の馴染は深くなるのである。男達ならば碁將棋、殊に女はお互ひに旅ゆゑの心細さが橋渡ししどなつて、物の本や糸針の貸し借りから、遂には箸箱を持ち寄つて、一つ鍋の御馳走をせ、るやうになるのである。お互ひに別れねばならぬ時

『屹度お手紙を下さいな。……來年も此處でお目に懸りませう。……氣をつけて被入しやいまし……』

泣かぬばかりに名残を惜みながら、又逢ふまでの印にとて、櫛や半襟を交換する。——先へ出發するものは、元結、油、白粉などを取まぜて、後の客へ残して行く。——待つ人多き家はありつゝ、馬車の上から去にともなげにハンケチを顔に當てる女の涙。——慙うして互ひに思ひ出の涙を絞る湯花小袖に、戀ならなくの床しさが染められるのである。自分は然うした温泉場の情緒に、深き興味をもつて居るのである。

十時になると、鈴と拍子木が聞えた。如山君はそい、く、さど時間湯

の見物に出かけた。自分は宿の傘をさして、煙るやうな雨の街を歩いて見た。右側の温泉宿の欄干に見覚えのある顔が二つ並んで居た。昨日一緒に來た學生である。

雨が降つて白根へ登る事も出來ないのであらう。氣の毒に。——一めぐりして歸らうとすると、街路の真中で二三人の土地の衆が高声で話し合つて居た。

『ヤイ、牛が一匹失くなつたぞ』

『誰の牛が』

『お前の牛がよ……』

『フン、俺の牛か……いまに見つかるとだんべえ』

格別驚いた様子もなく、呑気に構えてゐる問答の可笑しさに、如山君と顔を見合せた。

『随分大きな紛失物だね』

『僕等が巻煙草でも落した位な態度だ。……あれだから長生するんだね』

一木一石。都離れた山路の奥には、悠長な土産話の種が轉がつて居る。路傍の理髮店の鏡に懐かしい石楠の花がゆらくと赤く映つて居た。

曲り角の温泉宿の帳場には、大勢な浴客が集まつて居た。何か知らと覗いてみると、正面の高座に、夫婦ものらしい旅藝人が押並ん

でお定まりの浪花節を語つて居た。足をどめるまでもなく宿に歸つて一風呂浴びながら、如山君と旅藝人の頼りない身の空を語り合ふた。

戀の果やら。一挺の三味と、一本の張扇とを資本にして、三里の在所、五里の山家、鎮守祭や、養蠶の休みを目的にして漂泊ひながら、その日々の薄い粥さへ満足に啜り兼る彼等にも、又木枕の楽しい夢もあるであらう。——温泉宿の軒先に小腰を屈めて、帳場や番頭の膽煎りで客の座敷へ奉加帳を廻すと、徒然に苦しめられて居た人々が十錢二十錢と一筆づゝ喜捨すると、その金額に應じて長さ短かさ讀物に取かゝるのである。——元來彼等を藝の巧拙の上に於て

論ずるまでもなく、飢^ひしい時に不味^{まず}いものなしの格で暇潰しの材料に歓迎するのである。

湯女の面影

自分は恚^{いら}うした旅藝人の去來をも、同じ地球の上に産れた人間の端くれとして、親しみの眼を以て送迎するのである。彼等を道德の明るい鏡の前に立たせては朽葉ほどの價值でもないが、浮世の裏に住む木偶と見なせばその生活の上にも盡させぬ興味を感ずるのである。無智の戀、落人、貧苦、と段々に落魄してゆく、どん底に世を狭めて、風^{かぜ}のまに、宿り木のやうな佗しい旅を続けながら、濁れる

戀の慰めに縋^{すが}つて活きる心根は不惑なやうでもあり、楽しさうにも思はれる。彼等の終りは什麼あらうとも、髑^{むくろ}髑^{むくろ}をかくす芒の外には知らう筈がない。

夜に入つて雨も小降りになつた。按摩を頼んで、寢衣に着替へて廊下へ出てみると、山の肩が茫と明るくなつて居た。——灯を消して寝る田舎の癖で、長く續いた客室の障子が白々と暗がりに浮んで山脈の傾^{かた}げる方に、疎らに立てる樹々の梢は、そよともせず煙つて居た。——飼鳩が軒に匿れて、くくくと咽喉を鳴らす。浴槽に通ふ草履の音も絶えて、草津の夜は潜まり返つて居た。

按摩に腰を揉ませながら、十返舎一九の『草津道中膝栗毛』を讀

んだ。

上野國草津は、昔養老年中、行基菩薩の拓らき玉ふ温泉とかや。寔に海内無双の靈湯にして、諸病に驗あること普く人の知る所なれば、遠近の旅客此處に集ひて湯宿の繁昌云ふばかりなく、中にも湯本安兵衛黒岩忠右衛門等ことに家居華麗を盡し風流の貴客絶えず、彌次郎北八も今日湯宿に着きて、壺ひと間借り切り休息し居る處へ、宿の番頭來りて、嚙得草臥でムリませう、斯様に通帳につけて上げますから御入用の品は何なりと仰せ付けられませう(中略) 一體金毘羅の桐屋で一回遣らうと思ふたが、近ふて難波屋が宜いさかい、斯の肴云ひつけたが、見なされ彼處の料理は一番ぢやわいな(中略) 上方者の名染の楊弓場の娘、十六七にて濫りの剥けたる白者、按摩可市と連立ち來り云々(下略)

例によつて例の如く、駄洒落づくめに達者に書き捲くつてあつた

その昔の草津の湯道者生活が、古い錦繪でも見るやうに心に浮んでくる。——扱て現在の草津はと云ふと、旅館の設備も、浴槽の装置も、飲食物の供給もずんと進歩して、一九時代の俤はない。

來合はせた按摩の話によると、草津鐵道會社の指定旅館だけでも二十餘軒あるさうな。——來浴者の便宜上列記して見ると、一井館、日新館、望雲館、長養館、大東館、山本館本店、草津ホテル、桐山館、パン屋、ほその、大津屋、吉田屋、田村、草津館、山本館小林、松村屋、古久長、遠州屋、ての字、有田屋、伊勢本、民屋——以上が指定旅館で、これに準ずる旅館には、山幸、七星館、大屋、林屋、山田屋、武藏屋、月の井、羽田、ぬし屋、桐島屋等がある。

この外二三の中流旅館と十數軒の旅館が軒を並べて客を待つて居るのである。

風紀どか何とか六ヶ敷い理窟から離れて、自分は温泉宿の女中を昔の儘の湯女に見立て、詩材に加えて見ようと思つた。——上州の温泉宿では、夏の忙しい間だけ、籠の村々から色白の娘を呼びあげて、明暮の客の用事を辨じさせる場合が多い。斯くして客も疎らに秋立つ頃、貰ひ貯めた祝儀の袋を帯に狭んで、いそぐと山を降る野の小女達は、人戀しさの淡き愁ひも知り初める事であらう。

湯女と呼ばれて赤禱

行燈を配る廊下にも
籠の家の戀しさに
物を思へる夏山の

峽の湯煙はるくくと
都の客の髪かたち
かりそめに咲く山百合の
なよび姿の恥かしう

戀知りそめし眉刷毛の

夢を洗へる笥の水も
人は掬くばで、秋近く
枝にのこりし山の繭

風さやくと戸に白む

霧も冷たき湯の宿の

鏡のまへに座るとき

なびける髪もうとましや

瞳おほし明るく欄干しに

帯揺りあげて立ち盡くす

淋しみしき心、すいくと

宵の蜻蛉はまぎれけり

いつまでかくて在り侘びむ

軒に短かき日の影を

軽き草履に踏みながら

月ひろき野へ、われは歸らむ

草津の女中には、紅白粉の匂ひが些ない、口數もすくなく、正直

らしい態度に鄙びた床しさがある。それと云ふのも渡り鳥のやうな旅のものを嫌つて、近郷近在の素性の知れた娘を頼んで来るからであらう。——色深い造り花よりも、淡い野の花の方が幾段風情があるかも知れない。——何時までも憊うありがたいものだ。

西の川原

駒鳥の聲に眼覺めた三日目の朝は、氣持よく晴れて居た。湯揉みの唄も一段と調子づいて聞かれた。蟬が啼く、鳩が舞ふ、碧い空の彼方の緑の山のところどころに、ぼつちりと白いものが見え

る。恰がら青草のなかに兎が匿れて居るやうに見える。

『あれは雪で御座いますよ』

女中は事もなげに憊う云ふて去つた。

雪——雪——六月末の旅の泊りに、蟬の聲を聞きながら山の雪が見られようとは。——今から盛夏の涼しさが思ひやられた。

白根へ登山する客人が、馬の背に揺られながら出かけてゆくのが見える。草津からは三里半、山駕でも行かれるさうだが、再遊の樂みに残して置いて、西の川原の公園を見物した。途中土産物のくる、細工の店の前を通つて、高山植物の鉢植に足をとめた。岩鏡のお駒草だの、いろいろの種類が並べてあつたが、就中自分の心にと

まつたのは石楠の樹の多い事であつた。都市の庭に移し植えては、滅多に蕾の影も見せぬ石楠が六七尺高きは一丈ほどの梢もたわむに大きな赤い花をつけて咲いて居た。——仍然石楠は湯煙りのなかに心靜かに育くまるゝ深山の花であるのであらう。——こゝら山路の往きづりに、抑も誰人がこの花かげに思ひを残して去んだ事か。

琴平山の根を廻つてゆくと、其處此處に姿は見えぬ晝時鳥が啼いて居た。

山と山との重なり合つた峽の奥には、ぼつと霧が降りて居る。満目の緑のなかに躑躅やうつぎの花が赤々と咲いて、さまざまな象をした奇石を繞つて流れて來る谷川からは、濛々と煙が立のぼつて居

る。その谷川の積のあたりは西洋繪具で塗りつぶしたやうに鮮かな碧を湛えて居る。右からも、左からも、ちよろくと流れ落ちる川床の石も木の根も、悉く碧く染つて居る。自分はこれ迄這麼美しい川瀬を見た事がない。人爲的に企て及ばぬ大自然の雄渾な色彩は、黄金を以て購ふ事の出來ぬ廣大なものであつた。

草津ホテルの前庭に、外人の散策する姿が見えた。山も、木も、巖も、不斷の沈黙を續けて居る。自分は如山君と並んで、公園の亭に煙草を吹かしながら、心ゆくばかり時鳥の聲を聞いた。

「これが若し東京の近くだつたら、それこそ大したものだらうね」
「駄目さ。忽ち函根のやうに俗化されて了ふから、草津は却つて不

便な處に價値があるのかも知れないよ』

『つまり、途中の難路を越えて來た特志者への報酬として、大自然の慰藉が提供される驛なんだね』

話し合つて居るうちにも、胸の底まですーつと透き徹るやうな清澄な氣が、全身の濁つた血を洗ひ淨めて呉れる様な感じがあつた。『こんな山の奥に居て、湯上りの肌を秋風に吹かれたら什麼だらう大抵のものは里心がつくだらうね。……雪の底にかゝまつて冬籠りをする客もあるだらうが……』

秋立つ風の宵空に天の河のさや〜と流れるところ、七草の花の哀れを啼きしきる虫の音を踏みながら、思ひ瘦せたる失意の路を、

たど〜と辿つて行つたら、冥府の扉に着きはすまいか。

寒い〜冬の日、はた〜と鎖されたる客室の隅に只ひとり取殘されて、炬燵しながら好める本でも読み續けたら、甚麼に嬉しい事であらう。——スキーを頼りに通ふて來る學校の子供等や、櫓に乗つて麓へ出る土地の人々に立雜つて、日脚短かい冬の曆を温泉宿の古びた柱にめくり捨てつゝ、十篇の詩、百行の文を切ての土産にして、雪解の風に花の咲くまで草津の客となつて見たい。——子供等が中學の寄宿へでも這入れるやうになつたら、自分は心の欲する儘に、身輕な旅人になつて此處へ來ようと思つて居る。

避暑地としての草津温泉の結構は今更喋々する必要はないが、自

分は秋から冬へかけて、仄暗い障子のかげに机を据えて、胸の塞がるやうな淋しい思ひの湧くが儘に、夜となく晝となく、人目憚かる心づかひなしに苦吟して見たいのである。——名知らぬ山の禽も来て啼くであらう。風に吹かれて来る黄栌葉がうたゝ寝の夢を驚かす事もあらう。爐にかけて煮る鍋の浅きに、夕餉待たるゝ物の匂ひは雪の兎か、圍ひの太根か。——草津の冬——温泉宿の冬籠り——想像したゞけでも自分は堪らなく冬の日が戀しくなつた。

西の川原から圍山かこみやまの白根神社境内へ廻つた。此處から草津の全町が一目に見える。五十餘坪の湯畑(温泉の湧くところ)を圍んで、大きな建物の屋根が敷き重ねてある。——開け放した客室には、枕を

して講談本を讀んでゐるものや、娘に肩を叩かせて居る老爺や、碁盤の中に小首を捻つて居る連中が、古びた繪草紙のやうに見える。低い音締めのみ三味線が聞える。先刻見かけた「清元、長唄指南所」の看板の主が、滞在客に手ほどきの小唄でも教えて居るのであらう。大弓場の庭には、媼さんが矢取りに通ふて居た。宿に戻ると食膳に蕨が添えてあつた。その色の青さ、柔らかな風味は格別であつた。話に聞いて居る蕨の粥は定めし美味からうと思つた。

薬師堂の晩鐘を聞いてから程経て、草津ホテルの食堂へ出かけたが、外人を客にするだけに、スープもパンも料理も頗る氣が利いて居た。——窓に揺るゝ樹々の影、山の暗さを背にして、明るい卓にビールを吹く時の快感は、到底これを函根にも湯河原にも求める事は出来ない閑寂なものであつた。

提灯の明りに送られて歸つてから、明朝歸るべき荷纏めをしたが何かしら物足らない感じがした。

『伊香保が小説不如歸に因縁のあるやうに、草津にも何かローマンズがありさうなものだ』

恚う思つて、宿の人に訊ねてみると、果せる哉聞くも哀れに殊勝

らしい一場の物語が残つて居た。

それは『蹺車』の物語である。

過ぎぬる明治十五年九月の事。夏場の客がそろそろと歸り急いで二階三階の客座敷がぼつ／＼と齒の脱けるやうに淋しくなつて行く或日の黄昏、山駕籠に揺られて辿りついた浦若い夫婦があつた。

永らくの病ひに足腰も立たぬ良人は、駕籠を出るさへ女房の肩に縋らねばならなかつた。

『この通りの病人で御座いますから、お風呂へも、廁へも都合のよいお座敷をお願い申します』

忠實々々しく良人を援けて一室へ通つて、美しい女房が行燈のも

とに筆をとつて、すらく、と宿帳に記した夫婦の名は『静岡縣周智郡奥山村金田龍助と妻富美江』であつた。

龍助と富美江とは相思の仲であつた。

晴れて添ふたる嬉しさに二ヶ年は夢と過ぎたが、龍助が偶と腰の痛みに打臥してから、富美江の眉には暗い雲がかゝつた。醫者の診断は神経痛と極つたが、一向に藥の効驗もなく、日毎に瘦せゆく良人の寝顔に人知れず嘆き侘びるばかりであつた。

千町田の富も、いろは倉も、龍助の病を治する何の補にもならなかつた。人傳てに聞く祈禱の末まで手を盡したが、良人の病ひは重るばかり、富美江が淵の底へ沈んでゆくやうな遺瀨なさに悶えて居

ると、ゆくりなき人の口から、草津の湯の評判を聞かせられた。

『死なば諸共、幾百里あらうとも妾が子供を致しませう』

氣弱い良人を促がして思ひ立つたる旅の首途。泊りくの蚊遣のかげに味氣なく涙を拭きつゝ、野越え山越え、遙々と草津の宿まで辿り着くまでの女心は、いかばかり切なかつたであらう。櫛に捲いたる束ね髪が、悼はしや油氣もなくほつれて居た。

富美江は良人の枕邊に付きそつて明暮の粥を煮いたり、腰を擦つたり、傍で見る目も可憐らしきほど真心こめて介抱したが、時間湯への行き戻りに番頭の背を借りるが氣の毒さから、帳場へ頼んで蹩車を造らへて貰つた。

毎日五度。——時間湯の合圖を待兼ねて女の力に瘦せ枯れた良人を車に抱きおろして、手づから綱を曳いては、嬰兒の世話を焼くやうに浴槽へ沈めたり身體を拭いて遣つたりした。

『この親切、忘れはせぬ。……お前の志だけでも、俺の病氣は癒らねばなるまい』

昨宵は粥が二椀進んだ。今朝は什麼やら力づいたやうなと、にくくする良人の顔を覗いて、富美江の頬には欣びの色が仄めいた。斯くて霜夜の空高く雁金の啼き急ぐ頃、龍助富美江夫婦の名で、遠い在所へ心ゆかしの玉章を書いた。在所の人々からも芽出度づくめの返り事が届いた。——滞在百數十日。——雪降る朝も、雨の夕

も富美江は缺かさず寢車を曳いて熱の湯へ通ひ詰めた。

龍助が杖に縋つてよろ／＼と起てるやうになると、富美江はいそ／＼と紐を括けて紅緒の草履をく／＼しつけた。五歩の疲れ、十歩の喘ぎ、歩み馴れたる宿の軒端に春の陽が通ひそめると、今は早や寢車の要もなくなつたので夫妻は彌生の風に吹かれて、草津から梅咲く麓へ降る途中。——龍助は富美江の手を握と握つて、草津の空を顧みて嬉し泣きに泣いたとやら。

何と美しい物語ではないか。

伊香保に於ける浪子と武雄とは、小説に描かれたる新婚の楽しい夢の女蝶男蝶であつた。

草津に於ける龍助と富美江とは、それとは變つた現實の頼母しい物語の主人公である。

浪子は令嬢、富美江は世話女房。兩者の對照が、取も直さず伊香保と草津の土地柄を表示して居るのではあるまいか!?

翌朝自分は暗いに枕を捨て、歸り仕度をした。

さらば! さらば草津よ!!

圓太郎馬車の幌の蔭から顧みた草津湯けむり。——廣き空、緑の山、袂に輕き青葉の風に吹かれながら、中之條澁川を経て前橋の寓居へ戻つてみると、留守を灯もす書齋の窓から、子供達や伯母さんが人待ち顔に手招きして居た。

芙蓉村舎稿

■ 湘南逗子の池田々圃の邸には幾株かの芙蓉が赤く白く咲いて居た。自分はこれが嬉しかった。
■ 永く此處に住みつくなら、誰かに頼んで、「芙蓉村舎」と額を書いて貰はうと楽しんで居た。
■ それは叶はぬ望みとなつた。妻が大正六年の四月に死んだので田圃の家を引拂つて故郷へ戻つた。
■ この數篇は香氣な田圃に親子五人打寛いで起き伏した頃の悲しい形見である。
■ 大正五年の八月末から菜の花の咲く翌年の春までは我一家の極樂であつた。

露 提 灯

そぼくど降り續く冬田の雨に誘はれて、松葉ほどの麥の芽が蒔き藁の蔭から寒さうに覗き初めた。

今朝からの雨に畦を塗る人を見えぬ。黒く鋤かれた畑土に鴉が降りて、遠くも飛ばず田圃の晝をカアくと啼いて居る。此の頃は海が鳴つて、小坪の雑魚賣も來ない。——机の上に頬杖をのせて、しみくと座つて居る自分の左右には、雑多な文稿が散らばつたまゝ片づかずにある。——何から手をつけたら宜いのか一向に氣が乗

らない。依然として取りどめなく硝子窓の向ふを見てぼんやりして居た。

コスモスを抜き捨ててあとに空豆と莢豌豆の芽が僅かに青く伸びて居る。廣々と雨に濡れて畑肥に育まれる幼ない芽草が、これからの久しい霜にいぢけ乍ら、遠い／＼暖かい陽の春を待つなよかな蔓も薄紫の蕾も、皆あの一葉のいづれかに宿つて居るのであらう。可愛い／＼ものだ。自分の子供等も、病む父ゆゑに都を離れて、見知らぬ旅の空へ來ながら、兄は風、妹は手毬に、馴れては田舎の淋しさも忘れてお正月を待兼ねて居る。——そのいたいけな心を味はひながら、空豆の芽の戦ぎを見つめて居ると堪らなく佗しい心持になつた。

なつた。

上州のお祖父さんに遣るのだと噂もなく片假名で書いた總領の長い手紙と、次男の幼稚園から持歸つた色紙の手工を封筒に入れて、序に郵便局へ持つて行くやうに妻に渡した。

腹の白い名も知らぬ鳥が二羽、直ぐ前の畑へ來てチ、／＼と啼き連れながら塊の低きに匿れた。櫻山の上には雨雲が散らばつて、掛け稻の向ふの別荘の板戸はハタと鎖されて、桔槔は斜めになつた儘である。凡らく來年の夏まであゝして動かぬかも知れない。自分が此處の家へ越して來た九月の上浣には芋の葉がくれ水を汲ひ置手拭の女中の手に、朝も晩も桔梗はキ、／＼と晴やかに鳴つて居た。別

莊の主従が幾つかの行李を纏めて東京へ歸つたは、穗に抜けそめた芒の葉に、白々と天の河の夜風が吹き通ふ頃であつた。その時にも子供達は

『宜いなア、僕も東京へ歸りたいなア』

と淋しげに門に停んで居た。——渚の砂に草履を脱いで、貝殻のいろ／＼を拾ふた嬉しさも、馴れては淺草の繪看板に若かぬと云ふ、無理もない。松毬の青きながらに秋は老ひつゝ、田も刈り盡して冬になるまで、東京へ連れて行く約束を果さぬのである。

『何時でせう!! もう學校の退ける頃でせう』

裁ち縫ひの鉄の鈴を紅絹に沈めて、妻は時計を覗きに來た。そし

てあ、ち、んがあるやとやらで、小鍋に小豆を入れて自分の傍の火鉢へ持つて來て

『あ、ち、んに火がありませんから——濟みませんが』

と斷りを云つて去つた。雨は小降りになつて廳で晴れた。鍋の小豆がこど／＼と鳴りはじめた頃、マントを着た小さい兄弟が水道みちを遅々として戻つて來た。縁の柱の脇まで起つて行つてぼん／＼と手を鳴らすと『父さーん』『只ー今』と小半丁も先から驅け出して來る。鞆を外して、帽子を脱いで、行つて參りましたが濟むと兄弟は母が手製の茹小豆を喰べて隣の家へ遊びに出かけた。仲間外れに取残された正子は、べそを掻きながら母の傍に座つて、小布を剪りこ

まぎいて豆人形の着物を疊んで居た。

空はだん／＼明るくなつて、風の動くたびに、繩で括した芙蓉の實から静かに雫が揺れこぼれる。隣の土間ではどん／＼と臼を搗き出した。火鉢に炭をつぐと天井から蠅がうるさく降りて來た。

山の根のお百姓が、小菊の垣に笠を脱いで

『蜜柑の樹を上げ申す約束でしたが、今のうちに持つて來ませんと、鐵砲ぶちが擡ぎつて始末におへませんから』

と相談に來た。御苦勞賃は上げるから近所の人を頼んで持つて來て呉れるやうに頼んだ。植えるならこの邊が宜からうと机に座つて見える位置を極めて置いて、お百姓は戻つて行つた。

午後の郵便夫が五六通の手紙を持つて來て、妻に古足袋を無心した。郵便のなかに急な用件があつたので、電話をかけようかとも思つたが、一層一晩泊りで上京する事にして仕度をした。子供は羨ましさうに澁くなりながら、停車場まで送るのだと下駄をはいて門の外へ馳け出した。

『大抵なら終列車で歸るから——蜜柑の樹を持つて來たら禮を包んでやつて呉れ』

と頼んで置いて停車場へ急ぐと折よく上り列車が來た。汽車の窓から顔を出すと、改札口の柵に登りついた次男が

『父さん、これだけ泊つたら歸つて下さい』

これだけですよと繰り返しながら、右の手の人差し指を見せる、宜しくと背いて居るうちに汽笛が鳴ると、總領は淋しさうに笑つたが、次男は筒袖で眼を擦つた。

黄昏近く新橋へ下車した自分は、久し振りに赤い灯のなかを縫ふて用事を済ませた。時計を出して見ると十時些し廻つて居た。矢張り終列車で歸る事にして銀座の甘栗と、木村屋のパンと、菊屋で鐘詰などを買ひ歩きながら、十一時二十分の新橋發に乗つた。——汽軍は暗い闇に火の粉を散らしつゝ走つた。大船で子供の好きなお辨當を三個買つて横須賀行に乗かへると鎌倉の次ぎが逗子。午前零時四十何分かの下軍客は自分ひとりしか無かつた。改札係の驛員が片

手に提灯をぶらさげて居て

『この前の列車まで、皆さんが待て居られました。坊ちゃんも睡むがるのでいます。さし先きにお歸りになりました。若しや終列車でお歸りになるかも知れないからつて……これを預けておるでになりました』

と懇ろに提灯を渡して呉れた、自分は厚く禮を述べて提灯をとほして驛前の細路を右へ折れた。古襖の光琳を見るやうな星明りの夜の裾に、師走の海は高くく鳴つて居る。水道みちから田圃へ降りると落とし水がごとくと暗がりではいて居る。提灯の蠟燭を氣支ふて外套の袖に抱くと、しつとりと露のけはひが掌に通ふた。——家

の雨戸を叩いて置いて、内庭へ廻つて提灯を赤々とかざすと、八尺ほどの蜜柑の樹が夜氣の底に静まり返つて、つや／＼しい其處この葉かげに美しく色づいた霜の果が幾つとなくなり下つて居た。毒ど知りつゝ子供を起してお土産を分けて遣つた。幼きものは眼をこすりながら、小さい手に箸を割つて嬉しさうにお辦當の玉子焼を突ついた。(大正五年秋)

田圃の一日

花も盡きた芙蓉の枝に、青い實が群れて、明るい畑の風に乗つてすい／＼と蜻蛉が来る。——姿の醜い毛蟲が、芙蓉の葉をぐる／＼と捲いて、その裡で可愛らしい蛾に化る頃。——風邪心地の搔卷に肌を包んで、机の上の櫻山を見て居ると、カラン／＼と鳴子が聞える。誰が曳くのか知らと思つて下駄をはいて木葎の垣から裏手を覗くと、隣の納屋の盲目の媪さんが、悄然と明るい陽のなかに停つて居た。

紫蘇の花が白くこぼれた畑の隅の桃の樹に、百舌が鋭く低く啼いた。

東京行きが汽車がひびくと白い煙を向ふの山の蔭へ曳いて匿れた。

盲目の媪さんは、思ひ出したやうに鳴子の繩を曳いたが、朗らかな音はありつゝ、一羽の稻雀さへ立たなかつた。

『媪さん、お前の家の田圃には雀は居ないよ』

通りすがりの魚賣りが、鳳仙花の咲き残る納屋の脇へどさりと盤臺を降した。

近くの家に、現在の伴は立派に暮して居ると云ふ。不幸にして失

明した老婆は、慾の深い伴と、意地の悪い嫁に捨てられ、人の情に拾はれて此處の納屋に死ぬまで屈まつて居るのだとやら、その味氣ない暗い世界にも、尙自分の家の畑を働はり、不幸な伴の收穫を案じて見えぬ眼に鳴子を曳く親ごゝろ。——親馬鹿と云ふ眞理の鏡に、よぼ／＼した媪さんの姿を寫す時、自分は譯もなく涙がこぼれた。

『お媪さん、精が出ますね。今朝お萩を造らへましたから……』

樽のひまの手すさびを盆に載せて、妻が納屋へ持つて行つてやると、媪さんはにや／＼と笑ひながら、手探りに戸棚のなかへ押かきました。

『他家様から御馳走を頂きますと、伴や嫁が怒りますから』

何故か!?——小坪から来る魚賣の話で謎は解けた。——他家から御馳走を貰うやうなら、自宅から米も味噌もやらないぞ——と云ふのださうだ。

畑の葱を豆腐に刻んで、膳に二合半の酔を愛づる倅。

貰ひ風呂の濡れ髪を手拭に包んで、芋の葉の露更くるまで踊り歩く嫁。睦まじい放縦な若い夫婦から邪魔にされて、お佛壇と布圍一枚を貰つて家を出る時、媼さんは見えぬ眼に涙をためて

『どうぞ。屋敷へべん／＼草を生やさない様に仕て呉れるよ』

と泣いたとやら。——在所の宵にしら／＼と霜の降る夜、媼さんは行燈もない冷たい士間に篋を敷いて、どん／＼と藁砧を打ち初める

と、刻を見る眼を縫はれたる老の悲しさには、隣の人が寝たのも知らずに、夜の明けるまで槌を鳴らす事もあると聞いた。

『極道な倅や嫁の罪滅ぼしに、恙うして藁も叩きませんが』

何たる無惨な發心であらう。

愚痴も、未練も思ひ捨て、佛の國のお迎へを待つ媼さんは、これからの冬の夜寒を什麼して過す事であらうか。一椀の汁、一ぱいの飯、よしや無道な倅や嫁の筋なき戀みを買はうとも儘、自分は切て哀れなる媼さんに袖屏風して、暖かい一夜の夢を分ちたいと思ふ媼さんは切爐の傍で、ぼき／＼と枯木を折つて器用にマッチを擦つた。晝飯の湯でも沸かすのであらう。

自分は鎌を持つて来て畑の芋を掘つた。こぼくと土をほぐして
 箒に揚げて芋を洗ふにも、井筒釣瓶の重たきが却つて自分の筋肉に
 力づけるやうな感じがする。

學校から戻つて来た腕白どもは、鞆も帽子も放り出して蜻蛉釣り
 に出かけて行つた。海の風はさやくと田の面を渡つて、秋茄子を
 もぐ畑の人に、高く低く燕が飛んだ。

晝の膳に向つて居ると、『今日は』と郵便夫が玄關へ来た。茶を汲
 んで、巻煙草を摘んでやると、腰をかけてゆるくと憩んで行く。
 信書を入れた鞆をかけて、山程な小包を背負つた白髪の郵便夫が、
 うねくとした田圃を縫うた山の裾や海の岸へ一軒一軒配達する草

鞋の重さは並々でない。

『あうい。助さん………久木へ歸るかね』

門前を通る百姓を呼とめた郵便夫は、鞆の底から一枚の端書を取
 出した。

『これを重吉さんの許へ届けて呉んねえか』

『よし来た。直き歸るから』

コスモスの花の蔭で手渡した五六行の端書の文字は、誰から誰へ
 如何なる消息を齎らすのであらうか。

鳶の輪は高く晴れて、田圃の秋は静かである。

鳴子を聞きつ

停車場前を引拂つて、田圃の中の一軒家へ引越してから、明けても、暮れても鳴子を聞かぬ日はない、廻り縁の障子を開けて、朝風に蚊帳を疊むと、紅白の芙蓉と、なかば實となつた鳳仙花と、柔かに露に伸び行く満庭のコスモスの青さに軽い陽が動いて、六時五分發東京行の汽車が裏田圃を急いでトンネルに匿れる。庭先の井筒を汲んで顔を洗つてから、煙草とマツチを袂に入れて、畑を一めぐりする。

畑と云つても、庭つゞきの垣のうちにあるので、五六十坪の砂地に子芋や、葱や、枝豆や午茅がギッシリ作つてある。四季の漬物や汁の實には事缺かぬ廣さに、西瓜や莢腕豆が宜く出来ると聞いて、今から來年が楽しまれる。女中を廢めた代りに、一人もの老農夫を畑いぢりに頼む事にした。之れも毎日來るのでなく半日一日氣に向いた時、出掛けて來ては、風呂の筧を直したり、冬菜を蒔いたり草を抜いたりして行くので、自分の相手としては、この上もない結構な百姓の先生が出來た譯だ。

机に向ふと、田圃と杜を隔て、うね／＼とした櫻山一帯の頂の樹まで明かに見える。朝の雲、夕の雲、雨に、風に、さまざまに姿を

變へる雲の窓から、差しのぼる月の夜庭に涼みながら、遠く近く散らばつて居る赤い燈を數えつゝ、幽かに海の音を聞くと、初めて自分は『返子に居る』と云ふ感じがした。提灯がなくては門を出られぬ田圃の間の中に、安らかに寝ね、爽やかに眼さむる事の幸福を自覺した朝、麥飯の軽さが特に美味かつた。

都を離れて來た一族。——その中心となつて、平和に健全に二三年を暮さねばならぬ自分の机上には、而かも都門に在りしか日と變らず、多くの仕事が増されてある。日に／＼新らしペン先をかへてインク壺の蓋を開ける時、毛脛に通ふ畑の風は何より嬉しいもの、一つである。訪れて來る友も稀れに、止むを得ざる黙座讀書に此の

ごろ心の平らかな日が続いた。

仕事の暇には散歩に出る。子供等は母を泣かせつゝ着物を穢して雑魚を掬つたり、蜻蛉を釣つたり殆んど家には寄り付かない。僅かな間に土地の訛を交へて、自分を笑はせる事がある。——慙うした單調な生活を繰り返して行く半面には、何かな變化を求めなければならぬ。——それには月に二三度づゝ東京へ出て、人にも逢ひ、土産の書冊も抱へて戻りたい。今の處、ほかに之れと云ふ妙案もない。又考へやうと思はぬ。

冬菜蒔く頃

露のあかつき

湘南の海と云ふ觀念によつて支配される逗子に來ても、田圃の家に住んでは遠く潮の音を聞くばかりで、見るもの聞くものゝ總てが野趣に包まれて居る。秋茄子に風よけの垣が解かれて、里芋を掘つた後の畑つゞきに今日も昨日も冬菜蒔く在所の人が遅々として土に動いて居る。山が澄んで稻刈りが初まると、野の空に宙返る燕が減

つて、朝々の風に百舌鳥の聲が高くなつた。

蜜柑の葉わづか黄みて
ひろくくと相模の國の
山の端に露を降るらし
あかつきの静けさ寝ざめ

冬菜蒔くこゝら在所の
軒伏せて靡ける夢に
旅人のわれもまじりて

あかつきの静けさ寝ざめ

宵寝の癖の早起きに板戸を繰ると、井筒のほとりに豆菊が僅か蕾
んで、思ひなげな鳴子が、カラシ／＼と絶えず鳴る。刈り狭められ
てゆく田毎々々に、稻雀が忙しく群れて、向ふの路を豆腐屋がラッ
パも吹かすに通つて行く。——しつとりと露を浴びた山にも野にも
秋の意はしみ／＼と泌みこぼれた。

秋頭の寺をめぐりて刈る田かな

机の前の芙蓉も蝕んで、コスモスの花が陽に軽く咲きそよいで居
る。庭をめぐつて畑に出ると、懐かしい黒い土が鮮かに鋤かれて、

人參の葉が糸屑ほどに、青い芽で囁き合うて居た。牛蒡の葉、花菘
麥、葱、さうした野菜も眼に馴れて淋しくはないが、裏田圃を高ら
かに笛を鳴らして山に隠れる汽車をみて居ると、何となく東京が戀
しいやうに思はれる。

少年の汗

宵の風呂から上つて、日暮の門に停つて居ると、向ふの杜の蔭か
らチリン／＼と鈴を鳴らして二三人の少年が駆け出して来る。之れ
は夕刊を配るのであつた。

もう露の降りそめた畦道傳ひに下駄もはかず、野の一家軒、山の

うしろの別荘と散り／＼に別れて急ぐ少年の後を追ふやうに、刈田の鳴子が空々しく鳴る。静かな樹々に低く啼く鴉の聲に、野の耕夫の誰も彼もが鍬ををさめて戻つて行く。——チリン／＼、鈴の音は夕の風にまぎれようともせず漸々に近くなつて來た。自分の停んで居る前の路を駆け抜けて行く少年の額には、秋だと云ふのに珠の汗が流れて居た。

『伯父さん！ 何時でせう』

ふいと思ひ出したやうに立どまつて恚う訊ねた少年の瞳は活々と輝いて居る。

『六時半少し過ぎたらう。……夜學にでも行くのかい……』

『否……母様が横須賀から八時の汽車で歸るから』

『ち土産を待つて居るんだネ……本か、それとも靴か』

『……冬帽子だよ』

にこりと笑つて驅出した。後をも見ずに驅出して行く黒い素足に、葱畑の埃も鎮まつて居た。

汗の價！ 尊ぶべき努力の結晶として、彼等少年が母に托せる僅少な配達賃は、やがて新らしい帽子となつて貧しい家の土産となるのであらう。

芋の葉に露のぼる淺き黄昏。——少年の鈴の音は遠く／＼聞えなくなつた。——自分は例へなき快感を催ほしつゝ、少年の家の暗き

ランプの灯を思ふて、ほく笑まずには居られなかつた。

野の家の窓にも赤く灯がさして、床の下にも、庭草のそよぎにも虫の音が淋しく／＼聞えて来る。

刈り伏せてある黍畑の向ふにぼつかりと月が上つて、いつもの山の端に宵の明星が瞬いた。十月の海は高く鳴つて、背戸に枯れた芒の穂が、夢のやうに白く揺れて居る。

芋を掘る女

門の畑へ、山の根のお百姓が芋を掘りに来た。自邸の庭を通らねばならぬ畑の顔馴染に、盃茶を汲んで縁先で話して居ると、盲目紺

の筒袖に手拭を冠つた漁村の女房が、二人づれで門前に立どまつて、無遠慮に聲をかけた。

『子芋を些し分けて貰へまいかネ』

『オィヨ』と煙管を筒に納めて、『御馳走さま』と縁を離れたお百姓は、すた／＼と畑へ去んだ。自分も庭下駄を突かけてポコ／＼な砂畑をついて行つた。櫻山の上には冷たい雲が散らばつて、胡麻の實や紫蘇の花にも、常になく佗しう日影に薄れて居た。

『子芋を什麼するだ。十三夜さまへでも供へるかネ』

『インエ、男衆が賣りに出るから、妾等が荷だけ造らへさあ』

『馬鹿な事……小坪の漁師が芋を賣らずとも、魚があるべえに』

「それがなア、コレラの崇りで魚が賣れねえから、暫らく芋でも賣らざあ、コ、が干るでねえか」

と手甲をはめた指で唇を突いて笑つた淋しさ。

價が折合つたと見えて、兩人の女はお百姓に手傳つてセツセと芋を掘り初めたが、色の錆びかゝつた廣葉や水々しい莖を鎌で拂ひながら、何やら小唄をうたひ出した。——やがて十貫目ほどの土芋を背負つて『有難う御座んした』といそ／＼と戻つて行く足どりの力強さよ。——彼等は濱に地曳ひく手に馴れぬ畑の芋を掘つて、良人の爲、子供の爲に、荷造らへをするのである。それを苦勞とも不足とも思はぬ濱の女。都會の男が、女房にコートを着せる爲に破れた

靴を踏み歩くそれに比べて、『力』によつて活き、安んじて勞力を分つ邊土の習慣を快く覺じた。

風仙花雨降れば來ぬ魚賣

夕 の 家

二百十日の荒もなく、田圃の家に秋の風情が深くなつた、障子のかげに鐵瓶のたぎる朝、輕き芙蓉の陽に浮く庭を掃きめぐると、濯ぎ干す附紐の雫に逐はれて、赤い蟹か慌しく草にかくれる。

やゝ寒き井筒の水に耳朶を洗つて櫻山に對するとき、海の聲は風に乗つて、芋の葉の露を吹き鳴子を鳴らす、清燈なる秋曉の寢起きの

我に、廣い／＼天來の天氣は脈々たる『力』を授けるやうに感ずる。
早やすでに、鞆鞆に機嫌よき子は庭に降りて、學校づれの隣の子
を待つて居る。

東京行の汽車の笛を聞く度に、幼なき兄弟は畦道傳ひに學校へ行
く田圃の家の淋しさを語る。

『早く、東京のお宅へ歸りたいな』

憊うした私語を聞く度に、病弱の身を顧みつゝ何時までも子供等
を此處に置きたいと思ふ。土も踏まざる都大路に靴の紐を結んでや
るより、跣足の儘に蜻蛉とる現在の明暮が、彼等の將來にいかばか
り幸福であるかも知れぬ。

畑の芋を掘つて喰ふ夕の家に、灯は赤くお伽草紙の數々もあるで
はないか。

野の幸

躑躅寒く草履を踏んで畑に出ると、子芋、枝豆、牛蒡、葱、とりど
りの野の幸が秋風に色よい莖葉を擴げて居る。ちろ／＼と啼く虫の
音に停んで眺めやる出穂の小路を、籠を背にした四五人の女の群が
やつて来る。野に鎌をふる女でもなく、手拭を冠つて紺の手甲をは
めて、絲屑のほぐれたやうなうね／＼の畦に別れて、山の裾やら杜
の蔭の家々に魚を賣る漁村の女房どもであつた。浪の暗さに貝殻を

踏んで出る濱廂には、乳探る子も残して來たのであらう。思ひなげに笑顔を傾けて厨を覗く帯の間に、幾つかの小錢の音を聞くまでは日毎に憊うして逗子の街を歩き廻るのである。

斯くして得たる魚の代は、米となり、村酒となり、可愛ゆき子故の赤き帯とも花櫛ともなるのであらう。

夫の留守を鏡の前に寝ころんで小説を読む女。乳母に任せて乳を惜しむ女。

それに比べて、いかばかり殊勝らしいのは雑魚賣りの女房たちである。

田圃の家に引越してから泌々と感じた事は、土地の人の老若男女

が、決して無爲に日を暮さぬ事であつた。座して食ふに不足なき農家の人々までが、子供は學校から戻れば夕刊を配りに出る。自家の農閑には浦若い嫁女までが漁りの手傳ひに行くと云ふ習慣で、別荘商家勤人の外は、恐らくぶら／＼して居るのを見た事がない。殊に嬉しいのは祝言後間もないと聞く農家の若夫婦が、明るい陽に連立つて冬菜蒔きつゝ離れじと一つの畑に働いて居る光景である。心ゆかしの鬻を結ふて、眩しげに新郎の前に土瓶の茶を汲む睦の眞晝、よしやダイヤの指輪はさゝすとも、土に塗れた指の先に、大なる自然の恩恵が宿つて居るかのやうに見えた。

梨賣り少女

物賣りの女と云へば、稀々近くの在所から美しい娘が梨を賣りに来る。その態度が可愛ゆいとやらで家のものは顔さへ見れば屹度買つてやるやうだ。今日もその娘が来た。

盲目紺の筒袖に茜の帯、笠の下から涼しい眼に笑つていそぐと戻つて行く姿を見て、机上の紙片にこんな民謡を書きつけて見た。

梨を買はんせどろくと

味よい梨を子供衆に

恥かしさうに籠背負うて

厨を覗く束ね髪

涼しく笑める片えくぼ

いとしの郎さきに突つかれて

うしろ向いたる宵月の

水車の蔭の戀もある

肩に重たい小袖より

いつそ、身軽な裾からげ

氣儘に萱の軒葺いて

竈に柴も折らうもの

茄子の紫、齒に染めて

南瓜の嫁となる身にも

せめて蒔繪の櫛手箱

それが欲しさに、梨も賣るやら

見知らぬ里

稻刈り急ぐ田の畦を抜けて散歩に出ると、海へつゞく枝川の其處にも此處にも、短かい竿に絲を垂れ一魚を釣つて居る小供が多い。

二三寸ほどの魚鱗を魚籠に收めて歸る家路には、平和な灯が赤々ととぼされる事であらう。

九歳になる自分の總領は、いつしか馴れて五尾十尾の獲物を母に誇るやうになつたが、次男坊は蚯蚓が怖さに密かに兄を羨ましがつて居るばかりである。

蚯蚓はさに釣もせず

父のうしろに匿れては

田圃の橋の往き戻り

連もない子は淋しかる

たましく母に叱られて
都戀しと泣いたとて
都に家は無いものを
見知らぬ里は淋しかる

草の實

豆人形の顔ほどの白い小さい菊の花が、夜明の露に濡れて、今眼がさめたと云ふやうに肯づき合うて咲いて居る。夜の寒くなつた爲めであらう、蟲の聲も塊に稀になつて、畑の道を通うて來る女の雑魚賣が、頬冠りをする季となつた。

十月の海鳴りを聞いて蕪を蒔く土地の人は、わづかに片づいた刈穂を干し並べて、定めない雨雲を仰いでぼそ／＼と遣瀬なげに咬いて居る。——この頃は雨が多い。

朝の机に頬杖を乗せて、じつと静かに櫻山を見て坐ると、秋の樹々にかくれた向ふの街を、豆腐屋がラツバを吹いて行くらしいが、滅多に田圃の我家へは來ぬ。

憊うした静かな朝、自分は何を考へたら宜からうか。

茶を啜りつゝ、コスモスの花をみると、白も、赤も、知らぬまに色が褪せてだん／＼輪が小さくなつたやうだ。土に蒔かれて土にかへるまで、年々變る事なしに我等の臉に静かな花の影を映し、冷たい掌に黒い種となつて摘まれるコスモスの命に比べて、五十年と限られた人間界の喜憂起伏が餘りに慌しく呆氣ないやうに思はれる。コスモスの種、芙蓉の種、夕顔の種、茄子の種、それ／＼に紙袋を

貼つて茶の室の柱にかけて置く。もろ／＼の草の實は土の香を忘れても、やがて小さい夢をほぐしてすく／＼と芽を伸べるけれど、ひとたび柩の釘を打たれた人間の未來は謎である。

若し人間がコスモスや芙蓉の種のやうに、神の掌に拾はれて地球の上に蒔かれるものとしたら、思ひ／＼の好む處を神に告げ煩はす事であらう。貧乏人の種は金持の家へ、田舎の人は東京の眞中へ穢多村の娘は華族さまのお邸へ——自分は何處を選んだら最も愉快に幸福であらう!?

いつか自分は庭下駄をはいて、實となりかけたコスモスの花の傍に佇んで居た。ゴ—と云ふ鐵路の響きには、つとして振かへるを、東

京行の朝の汽車が高く／＼汽笛を鳴らして山の裾を廻つて行つた。
『左様だ。午後の汽車に間に合はせなけりやならなかつた』
『い、い、い、い、い』と机の前に戻つて、萬年筆にインクを注して原稿用紙に
對つた。

空想の刻は過ぎて、實務の活力が指の先に集まつて來た。——時
計の針は七時を指して、家のぐるりの稻刈の人の空へ、山の椎の樹
を離れた鳶が、大きく輪に飛びながらピロ、と啼いて居る。

旅 役 者

演藝館と云ふと立派だが、看板もあげてない穢ない小舎だ。二階
へ上ると自分達五人の外には未だ一人も見物は來て居なかつた。蜜
柑を剝く、南京豆を剝く、頭痛膏を貼つた妻までが欠伸を噛み殺し
ながら

『何時始まるのでせう』

などと愚痴をこぼす。——狭い階子をトン／＼と踏んで、大きな
太鼓と小さな太鼓を両手にさげて登つて來た若い男が、二階の窓を

がらりと開けて戸外に向つて二個の太鼓を据ゑた。續いて登つて來た五十位な女が筒袖袴纏の襟をすかせて撥を持つてヂャカ／＼と弾き出すと、若い男はヨ／＼と元氣よく懸聲しながら客よせの太鼓を叩きはじめた。何とも云へぬ喧ましさだ。妻は眉を顰めた。子供等は蜜柑の房を前齒にあてた儘、眼をキヨロ／＼して居る。

自分も堪らんなど思ひながら、冷たい柱に背を靠せて、男女の後姿を見て居たが、その騒がしい物の音に伴れて、例へなき寥しさを強ひられるやうな心持になつた。

『もつと、早く』

『よし來た』

チャ／＼チャン／＼と、絃に合わせて撥を調べる男の姿は、一目に惨めな旅役者である事が知れる。綿の見えさうな絹物の褌袍を着た襟の上に、白い耳朶が浮いて、調子を早めて撥を打込む度に、貧しさうな袖口も露はに白い細い女の様な腕が動く。

太鼓の音と——三味の音と。

暗い／＼山を見ながら、恚うして腕の疲れるまで太鼓を叩く若い旅の藝人は、六時となり七時になつても、木戸口へ來る人影の少ない夜の街を、什麼云ふ心持で見居るであらうか。

父もあらう、母もあらう、雨の洩らぬ屏風のかげに産湯を使つた眉目の美しい子は、やがて恚うして家を離れて味氣ない旅から旅を流

れ歩くのであらう。氣の毒なものだ。

三三十の見物の拍手に餘儀なく幕が開くと、今、自分のうしろで太鼓を叩いて居た若い男は、いつの間にか美しい令嬢になつて、紙をつないだ書割の玄關から品を作つて空氣草履を踏んで來た。見物は喝采した。自分は餘り馬鹿々々しいので、睡がる次男をつれて他のものを残して木戸を出て、停車場の前から田圃路へ折れた。

十四日前の月は明るかつた。扱き捨てた藁が束ねられて路傍に立てられてある間を歩きながら、何となく彼の女形の得意らしい態度を考へてみた。

うす綿の寒き山河、故郷遠き誰彼を戀しとも思はず、乞食のやう

な生活をつゞけながらも、埒もない見物から喝采されるのを唯一の慰安として満足して世を渡る彼等に比べて、——物質にも、精神にも、杞憂と不安を斷ち得られぬ現在の自分を顧みると、双の袂に重いものを詰められたやうな嫌な心持になる。——留守の案じもなく差當つての仕事もなく、氏名も告げずに、只物好きな男として彼等の仲間に加はつて、酒でも振舞ひながら四五日の旅がしてみたい。稻刈る村の祭の宵、錠戸のかけに短かい蠟燭を點して、畑の風を憚りながら安鏡に眉をつくる彼等の瞳にちらつくものは、故郷の山か、乳母住む濱か、花簪を髪に挿す里の少女のそればかりであらう『父さん。僕草疲れた。おんぶして』

『そんな弱い事を云ふと、豪い人になれないぞ』

『フン、豪い人に……』

澁々と手を曳かれて、とぼ／＼と歩む幼ない子。——若しこの子が旅藝人にでもなつたら——力をこめて小さな掌を握りめめると、田の畔の何處かで露を撥る蟲の聲がぼ／＼と聞へた。

蚊や草

■ 机の傍に蚊遣を焚きつゝ句稿を編んだ處から「蚊や草」と名づけた迄である。
■ 俳壇の流行に誘はれて作つた句は一つもない。すべて自己本位の苦吟である。
■ 幾冊かの句帖を年代的に調べてゆくと、扱て氣に遣つた作は誠に些ない。
■ 然し自己の境遇、生活、居所の變遷を回顧すべきヒントが一句々々に踏込まれてある。
■ 「今朝の秋」と「針坊主」は湘南逗子に於て、「山の桑」はそれ以前東都に於ける作である。

今朝の秋

残暑なほ月に人ある渚かな

菊植えて手に土残る夕餉かな

芋堀りは嬉しがる子の運びけり

長女百日咳に悩む

コスモスの風に咳く子や被布着する

草りや紋

十月の海鳴れば蒔く蕪かな

夕されば風呂汲む妻や山の月

かけ稻のそこら蒔き行く冬菜かな

虫啼けば淋しがる子よ膝貸さむ

豆腐屋の早や起きてあり今朝の秋

あらはなる推の梢や今朝の秋

鳳仙花雨降れば來ぬ魚賣

癪不足の眼に芙蓉ある机かな

蝕みし芙蓉に二百十日かな

初秋の畑にありぬ紫蘇の花

花芙蓉思ひ瘦せたる妻とあり

初秋の田圃に住むや汽車の笛

高々と蜻蛉来るや屋根の秋

山火事のおどの静かや川涸れぬ

||以上、大正五年九月より十二月までの句帖より||

針坊主

行く年を居睡る妻や針坊主

髪結ふて鏡しまふや冬の蠅

障子はる糊も足らずよ宵落葉

張板にはるものもなし冬の蠅

布圍干して叩く埃りや庭の雪

歩くだけ路つけの田の雪久し

夕雀啼きひそむ田の雪消かな

故郷を遠き婢よ莖漬くる

砂深き渚の草や冬の海

燈し去る夜汽車のあとや春の雪

屋根歩るく鴉に海の寒さかな

屋根に露の降るらし枕低う寝る

海の風屋根へ冠さる夜寒かな

爰に脱ぐ端居の寒さ寺椿

椿咲くや奉公にゆく隣の子

庭下駄の土も乾びぬ寒椿

据風呂に二月の畑の寒さかな

落梅花余寒の山に鎖しけり

雲透いて陽の來る畑や麥肥ゆる

暖かや枯れも盡くさで去年の草

雪晴れの海鎮まりし岬かな

妻病む三句

かゝまりて手足瘦せたる春寒し

古雛の顔拭いてやる灯かな

白粥も味氣なや聽て雁歸る

一尺の麥に風ある臃かな

亡兄一年忌二句

そら萱の花の曇りや一年忌

春曉の寺へ賽錢送りけり

蒔くものに畑相談や囁れる

沖雲に小舟いざよふ春日かな

風邪起きの梅に日長けし机かな

春曉をほき立つ麥のそよぎけり

春曉の汽車に寝てゆく安堵かな

春曉の陽に啼きいさむ雀かな

四五日の留守を咲きけり露の臺

畑隅に花となりたる蕪かな

初蛙火の番も来ずなりにけり

日毎子等を連れて病院へ

蒲公英に土踏みこぼす田道かな

||大正六年一月より四月までの句帖より||

山の桑

湯たんぼや火事を怖がる男の子

木兎やそろ／＼経も果てる頃

猿曳の猿を叱るやそら心

水仙や原稿を書く肩の凝

蛙啼くやそこはかとなき暮るゝ草

暖かや田圃夜草を人の來る

燕やぬるき茶を汲む小商ひ

囁や姉に忌明けの襟を剃る

束ね置く儘の庭木や春淺し

常磐樹の明るき風や梅蕾む

雉子啼くや枯れしが儘に山の桑

鎌おろす草ふかくと卯月かな

梨棚の虫とるそこから春惜む

屋根草の揺れく春の雷暗し

花桐に日も夕なる雀かな

夏の露すでに團扇の風睡し

あちら向いて柱のかげの髪涼し

||高尾登山二句||

青嵐山冷を蹈む草履かな

鵲鴿の尾に風暮るゝ清水かな

夏山の霧に寝しづむ灯かな

佛参の蜻蛉を見る眼うるみけり

葛水も佗しき母に歸省かな

夏虫やひろくと住む在所の灯

明易く庭掃いて顔洗ひけり

明易き妻が水仕や只睡ひし

鯛やすでに蚊帳つる山の風

鯛や四十九日の忌に詣る

月に歩む夜道の汗や二三人

いつまでも夜風の辻の踊かな

盗まるゝ柿に踊をうとみけり

停車場へ冬の月夜の一人かな

冬椿梭やすめ焚く竈かな

いつか冬の月出てありぬ山仕事

||大正三年より五年までの句帖より||

大正七年九月十五日印刷
大正七年九月廿日發行

▲定價金八拾錢▼

不許複製

著作者 平井晚村

發行兼 東京市下谷區上野櫻木町十七番地

印刷者 相良邦之助

印刷所 東京市神田區美土代町一丁目三十一番地
精美活版部

東京市下谷區上野櫻木町十七番地

發行所

武俠世界社

振替東京三四〇六〇

31
747

終

